

ラオス国立大学経済経営学部図書館の 運営・管理支援について

柴尾 晋*

1 はじめに

国際協力事業団（Japan International Cooperation Agency：以下 JICA と略す）の要請により、第1次（2001年3月21日～4月4日）及び今回の第2次（2001年9月3日～10月27日）の2回にわたり、ラオス人民民主共和国（Lao People's Democratic Republic：以下ラオスと略す）に赴任した。派遣については2回とも図書館庶務課中林（図書館システム担当）を伴った。但し、今回の第2次派遣時は中林のみ主業務が図書館システム設置・管理指導のため9月15日～9月28日の短期派遣であった。第1次派遣では、ラオス国内（主として首都ヴィエンチャン市内）にある各種図書館の視察および調査を行い、ラオス国立大学経済経営学部到新設される図書館の運営・管理のイメージを模索した。その後第2次派遣までの間は、国内において、第1次派遣での事前調査を基にした図書館マネジメントおよび図書館システムを構築し、第2次派遣に向け準備を行なった。

現在 JICA では2000年9月から5ヵ年計画で進めている「ラオス・プロジェクト」により、ラオス国立大学（National University of Laos：略称 NUOL）に5年前に設置された経済経営学部（Faculty of Economics and Management：略称 FEM）の拡充・強化及びラオス・日本人材センター（Lao-Japan Human Resources Center：通称ラオ・ジャパンセンター：略称 LJ センター）の運営・管理を長期にわたり支援している。このプロジェ

* しばお・すすみ / 和泉図書課

クトはJICAプロジェクトの中では最大規模であり、フォローアップ期間を含めれば10年近くになる長期間のプロジェクトである。今回の正式な要請は、「ラオス国立大学経済経営学部支援及びラオス・日本人材開発センター短期派遣専門家（図書館運営）」であり、具体的には、ラオス唯一の大学であるラオス国立大学（NUOL）に新設された経済経営学部（FEM）の新学舎建設に伴い併設される図書館の管理・運営について指導・支援する役割を負う短期専門家としての派遣であった。

2 ラオスの概略

インドシナ半島にあるラオスは、周囲をタイ、ミャンマー（ビルマ）、中国、 베트남、カンボジアの5ヶ国に囲まれた海に面さない唯一の内陸国である。国土の面積は約23万6800 km^2 であり、日本の本州とほぼ同じ広さである。国土の北から南までをメコン川が流れ、その大部分がタイとの国境となっている。国土の約90%は山地、丘陵、高原で占められているが、地勢的には、北部には800～2000m級の山々が連なる山岳地帯であり、南部はメコン川の恵みをたたえた水田や未開の熱帯雨林が広がる平野地帯というように大きく区別される。気候は熱帯モンスーン気候であるので、1年は雨季（5月～10月）、乾季（11月～4月）と大きく分かれるが、1年で最も暑い時期（3月～5月）を暑季と呼ぶ場合もある。行政的には首都ヴィエンチャン（人口約60万人）の特別市及びルアンパバーン（Luang Phabang）、サワンナケート（Savannakhet）などの16県に区分される。

< ラオスの概要 >

正式名称	ラオス人民民主共和国 Lao People's Democratic Republic
面積	約 23 万 6800 km^2
人口	約 521.8 万人 (2000 年推計)
首都	ヴィエンチャン (Vientiane)
政体	社会主義共和国
元首	カムタイ・シパンドン (Khamtay Siphandone) 首相 (1998 年 2 月 4 日選出)
宗教 言語	仏教 (上座部) 徒が全国民の約 95% を占めるが、国教ではない。 公用語はラオス語。その他各民族が独自の言語を使用している 場合がある。
通貨単位	キープ (1US\$ = 約 9500 キープ、2001 年 10 月)
財政年度	10 月 1 日 ~ 9 月 31 日
日本との時差	-2 時間

3 ラオスにおける教育事情

ラオスがフランスの植民地になる以前は、一般国民のための学校教育は整備されることはなく、一部の指導者教育のためにエリート養成教育機関があっただけである。19 世紀後半フランスによる植民地支配によって、ラオスには近代的な西欧式教育制度が初めて導入された。これはラオス人のためと言うよりは、あくまでもフランスのインドシナにおける効率的な植民地経営が目的であり、植民地支配の手先として働いてくれるラオス人下級官吏を養成するための教育制度にすぎなかった。当時フランスはラオスを重要視することはなく、直接的な統治を行わず、ヴェトナム人を使用していたラオス人を管理させる「愚民政策」を行ってきた。このため、ラオス人への中・高等教育は一切行なわれず、ラオスに中等教育機関ができたのは 1920 年代後半のことである。

やがて 1954 年にフランスから独立したものの、ラオスにおける中・高等教育制度は遅々として進まず、独立後の政府指導者たちも国民への教育に関心が薄く、従来のフランス統治時の教育制度を温存させる政策を取った。そのため、エリート教育機関は相変わらずフランス語による授業を継続させていた。

1975 年のラオス愛国戦線 (パテト・ラオ) による社会主義政権の樹立と

ともに、教育政策も根本的に見直された。これまでの日本と同様な、小学校6年、中学校3年、高校3年のいわゆる6・3・3制が改められ、小学校5年、中学校3年、高校3年、高等専門学校（単科大学）3～6年となり、小学校の5年間が義務教育と定められた。また、フランス語を中心とした授業から公用語であるラオス語を中心とした授業へと転換した。しかし、ラオス人だけの十分な教育環境を整備することは困難であり、フランス語の代わりにロシア語の影響が小さくなかった。

4 ラオス国立大学

（National University of Laos）の誕生

ラオス政府は、国家の発展のためには上級の管理者、経営者及び技術者の不足を解消するため、高等教育の強化が必要であると認識し、高等教育の整備を進めた。1995年、アジア開発銀行の支援を得て中等後教育合理化プロジェクト（Postsecondary Education Rationalization Project）が開始され、この年の6月にラオス国立大学が設立された。ラオス国立大学の前身は、教育大学、国立工科大学、電子技術学校、（ともに教育省所管）の他に、ヴィエンチャン高等運輸交通学校（公共事業省所管）、タットン高等灌漑学校（農林省所管）、ヴィエンチャン高等建築学校（通信省所管）、医科大学（保健省所管）、高等法律学校（法務省所管）など5つの異なる省のもとにあった11の高等教育機関である。こうした高等教育機関を統合し、また経済経営学部を新設することにより、効率的でかつ効果的な人材育成を図った。

ラオス国立大学には、理学部、教育学部、経済経営学部、工学部などの8学部と1基礎教育部（教養部）がある。ラオス国立大学は、ヴィエンチャン市内及び近郊に5つのキャンパスがある。大学本部、基礎教育部（教養部）及び理学部、教育学部、人文社会学部、経済経営学部はドンクキャンパスにある。この他工学部はソックパルアングキャンパス、農林学部はナボンキャンパス、医学部はピアワットキャンパス、法学部はボンパーパオキャンパスにある。

学生数は2001年現在で約1万2千人であり、男子学生約7割、女子学生

約3割である。入学選考方法は2種類あり、一般入学試験による選考を経た受験入学と、各県に割り当てられた人数枠に従い、県の推薦に基づき入学をする推薦入学がある。受験入学が約40%であり、推薦入学が約60%である。学部の子生数は学部により様々であり、工学部、人文社会学部が2,500人を越すが、教育学部は50人以下である。

5 経済経営学部（FEM）の新設

1995年、ラオス国立大学はこれまでの高等教育機関を統合し、総合大学としてスタートした。これと同時に経済経営学部が新設され、大学の中で唯一前身母体のない学部が生まれることになった。日本政府は新学部設立に際し、JICAを通じて多くの専門家を派遣し、2000年からラオス・プロジェクト技術協力を開始したことは、前述の通りである。

2001年9月に経済経営学部の第1期生が卒業した。ラオスでは日本のように在学中に就職活動は一切行なわないので、一時的に無職の状態が生じてしまう。そのため卒業生がどのような職種についたかなど、追跡調査が今後必要となってくるが、卒業生のこれからの経済・経営分野での活躍が期待されている。また、同年10月に経済経営学部の新学舎の竣工式が執り行なわれ、今までの教育学部での肩身の狭い間借りの状態から解放された。初めて卒業生を送り出し、新学舎を手にした経済経営学部は次へのステップへと踏み出し始めていると言える。

6 経済経営学部図書館（FEM Library） について

新学舎は2001年5月に竣工したばかりのLJセンターと隣接し、広大なキャンパスに点在する東南アジア特有の朱色の瓦葺である他の学舎とは異質な感じがする。新学舎は大きく分けて、講義室、大講堂、コンピュータ室、研究室、学部長室、学部事務室などの教育・管理棟と、教育・管理棟とは独立した建物である図書館（自習室）とに分かれる。図書館は芝生を挟んだ形で教育・管理棟が囲み、教育・管理棟とは回廊で結ばれていて比

較的アクセスしやすくなっている。図書館には書庫が設置されこの中に書架が配置されている。図書館の多くの部分が閲覧室になっており、雑誌書架及び新聞書架も設置されている。書庫の入口前にカウンターが設置されているので、ここで利用者への対応ができるようになっている。この図書館には一般に授業が行なわれる講義室と同様にエアコンが設置されていない。設計担当者の話によれば、「無償援助の精神を尊重し、現状の設備レベル以上は作れないので、ラオス国立大学の図書館、講義室にエアコンが設置されていない以上、この自習室にはエアコンは設置されない。」とのことだった。また「ここは図書館ではありません。あくまでもここは自習室です。このため図書館としては設計されていません。」と、この担当者から念を押されたが、たとえ名称が「自習室」となっていようが、ここで図書館の管理・運営・サービスを展開すれば、利用者が「図書館」という認識をしてくれるものと期待している。そのためここでは「自習室」という名称は使用せず、「図書館」という名称を取って使用することにする。

5ヶ年計画のラオス・プロジェクトにおいて図書館には、毎年500万円の図書購入費が当てられている。毎年約2,000冊ずつ、プロジェクト終了時には1万冊になる計画である。図書は図書予算での購入以外にも団体、個人からの寄贈や研究室、資料室からの図書館への移籍などにより、図書の増加が見込まれている。プロジェクト終了後は学部の予算から図書購入をしなければならず、慢性的な予算不足が懸念され、将来の課題となっている。

7 図書館技術指導

経済経営学部図書館支援の主な活動内容は以下の通りである。

活動日程

9月4日（火） ラオス着。JICA ラオス事務所着任報告。

副学長、カムルーサ経済経営学部長表敬訪問。

9月5日（水） LJセンター「Japan Club」を図書館準備室として設営

9月6日（木） FEM新図書館担当者サイカム氏と業務打合せ

～7日（金）

9月7日(金) 新図書館施設見学
9月10日(月) FEM 図書の FEM Office から LJ センターへの図書の
～ 搬出及び分類作業
9月13日(木) FEM 図書データ入力のためのコンピュータトレーニング及び目録法(AACR2)、分類法(DDC21)教育
～
9月19日(水) LJ センター図書データ入力開始
9月20日(木) 図書の運び出し完了
9月24日(月) FEM 図書館システムセットアップ完了
9月25日(火) FEM 図書データ入力開始(書誌データ)
9月26日(水) 図書館システムプレゼンテーション(LJ センターにて)
FEM 図書データ入力開始(所蔵データ)
9月28日(金) LJ センター図書データ入力完了
10月1日(月) LJ センターメディアルーム一般公開開始
10月9日(火) FEM 図書装備開始
10月10日(水) FEM 新校舎竣工式への出席
図書データ入力及び装備作業への学生サポートの開始
10月17日(水) 経済経営学部主催新学舎完成記念仏式典への出席
10月19日(金) FEM 図書館点検
10月22日(月) FEM 図書データ入力及び装備完了
10月23日(火) FEM 図書館への図書の搬入及び書架への配架
～ 寄贈図書データ追加入力及び装備開始
10月24日(水) 書架配架終了
10月25日(木) 図書データ最終点検
各種リスト出力
FEM 図書館へのパソコンの移設及び業務引継ぎ
JICA 事務所への離任報告

赴任期間も約2ヶ月と限られるが完成理想は無限に広がりやすく散漫になりがちなので、予め今回の目標到達点を設定しておき、これを目標にシステムの設計、業務指導を日本で計画し、ラオスで実行することにした。今回の目標到達点は、図書館システムを導入することにより、図書館員(係員)1名及び業務用PC1台で図書の受入業務、整理業務、装備業務、基

本台帳（図書原簿）作成業務、利用者用検索リスト作成及び図書検索が可能にすること、とした。

この目標達成には図書館システムの導入が前提となっている。そのため、既存の図書館システムのパッケージを導入するか、もしくは新しく図書館システムを開発するかが問題となってくる。システムについてはJICA プロジェクト担当者、図書館庶務課システム担当者を交えて時間を掛けて議論を行なった。紆余曲折あったが、最終的にはプロジェクト予算、準備期間及び目標達成のためには新しくシステムを開発するしか選択の余地がなかった。幸いにも本学及び図書館事務部の全面的な協力があり、また図書館庶務課システム担当の優秀な人材の弛まぬ努力のおかげで、到達目標を満足させるシステムを開発してくれた。

8 ラオスでの指導

第1～2週

ラオス到着後、副学長、経済経営学部長の表敬訪問を終え、早速作業計画に移った。図書館の専任担当者がサイカム氏になった旨報告を受けた。サイカム氏は2000年11月、本学へ大学事務全般について1ヶ月間研修に来ている。サイカム氏とは初対面ではなく気心も知れているのでコミュニケーションは比較的取りやすかったが、図書館業務指導に関して言えば少々不安があった。作業室がなかなか決まらず、結局LJセンターの「Japan Club」の1室を新図書館への引越しまで間借りすることにした。この部屋は普段余り使用することはないが長期間占有することができ、また作業をするのに十分な広さがあった。しかし、LJセンターの中でこの部屋のみエアコンが設置されていなかった。天井ファンは設置されていたものの、暑季（4～5月）ほど暑くないが、連日33℃を越すラオスの暑さは相当応えた。時折この部屋を訪れるラオス人でさえ、「なぜこんな暑い部屋で仕事をするのか？」など質問していく位だった。

2000年度の予算で購入した図書が約1,600冊あった。これらの図書は7月に納品されたばかりで、納品リストを基に現物確認を済ませ、ダンボールに詰められていた。65箱のダンボールが経済経営学部の事務室の片隅に

置かれ、狭い事務室を余計に狭くしていた。当初は1週間でダンボール箱半数をセンターへ運び、最初に分類作業を始め、システムセットアップ後データ入力を行ない、事務室に残したダンボール箱は新図書館完成後、直接新図書館へ運び込む計画であった。分類作業が思った以上にはかどり、結局は全部をセンターへ運ぶことになった。運搬には車を使用した。ダンボール箱の車への運び入れ及び作業室への運び込みには学生が手伝ってくれた。こうした学生が手伝うシーンはこの後多く見られ、自分にとっての忘れられない思い出へと結びつくことになる。

分類はDC21を底本とし、タイトルページ裏にあるCIPデータを流用するように指導した。但し、このデータは不正確な場合があるので、必ずDC21を確認するように注意した。まず、図書に挟まれていた納品リストに分類を書き出し、DC19、DC20及び分類なしの場合は新しくDC21を付与した。絶えずタイトルページ、タイトルページ裏を見るよう指導していたので、データ入力の指導が比較的スムーズにできた。この作業はサイカム氏と2人で行うことが多く、時々新任の若い経済経営学部の先生が我々の作業を手伝ってくれた。先生方も卒業式、新学期の準備、学部の引越しなどで多忙であったが、たとえ半日であっても助かった。それ以上に図書館の開館準備に積極的に教員が関わることは意義があるように思える。なぜなら、図書館への愛着はもちろんのこと、図書に直接触れることで知的好奇心をくすぐるいい機会になったのではないかと言える。作業中も時折図書を開くシーンがよく見受けられた。

図書館システムに早く慣れてもらうため、予め練習用パソコンを準備することにし、テスト用システムをインストールしてもらったノートパソコンを日本から持参した。後日システム担当の中林が、図書館に設置されるパソコンにシステムをインストールするまで、このパソコンを使用して操作方法を指導した。このシステムが完成し、ノートパソコンにインストールしてもらったのが8月初旬であり、指導する立場である自分ですえも何とか使えるようになったばかりであった。特に検索手法については丁寧に指導した。これと平行してAACR2の目録規則についても指導した。ダミーデータとして本学図書館所蔵の経済学、経営学関係の書誌データも約1万件入力しておいたので、検索練習として使用し、本稼動の際には流

用入力を考えていた。しかし、今回納品された図書を検索したが想像以上にヒットせず、今後のデータ入力の方針を変更することになった。

第3～4週

9月17日から新学期が始まり、先週まで閑散としていたキャンパスが学生で賑やかになってきた。日本からシステム担当の中林が到着し、パソコンへのインストールをすぐに開始する手はずになっていたが、予定したパソコンの準備が間に合わず、インストールを開始できたのは週末のことであった。翌週の月曜日にシステムのインストールが完了し、火曜日から本システムでの書誌データの入力を開始した。所蔵データの入力を開始したのはその翌日からであり、この日の午後から書誌データを作成し、更に所蔵データ作成した後、書誌データとリンクさせるという基本的なデータ作成パターンを開始した。9月25日に新図書館システムのデモンストレーションを行なった。当初こうしたデモは予定していなかったが、ラオス側の強い希望があり、デモを開催することにした。今回のデモには約15名が参加した。デモはLJセンターにあるコンピュータ室のパソコンを使用して、概要説明の他に実際に検索を体験してもらった。

この週末で中林が帰国するので、彼にはシステムのトラブルを極力解消してもらおうようお願いした。この週はデータ入力が遅々として進まず、入力されたデータのほとんどに無視できないミスが多数あったため、全てのデータに修正を必要とした。どこが間違いなのか、AACR2を参照しながら説明したが、自分の語学力不足のためか、細かい説明がうまくできずに苛立つこともしばしばあった。繰り返されるミスに関しては、部屋に設置されていたホワイトボードにミスを書き出して、絶えず注意を喚起した。中林は週末に帰国し、赴任期間も折り返しにきたことを実感した。

第5～6週

10月になったとは言え、連日暑い日が続いた。10月3、4日にはボートレース祭が開催されメコン川の川辺には露店が立ち並び人々で溢れていた。大学は休日になることもなく、授業も普段通りに行なわれていた。我々の

作業も休むことなく普段通りに行なったが、サイカム氏が休暇を取るとのこと、ポートレースの初日だけ仕事をし、最終日は休むことにした。今から思えば恐らくサイカム氏が気を遣ってくれたのだろう。

データ入力作業は今週から新任の若い先生が半日だけであったが、連日手伝ってくれた。この頃はサイカム氏もだいぶ入力作業に慣れてきて、この新任の先生への指導は自主的にサイカム氏が行なったことで、私は技術指導がうまくいったことを確信した。

10月8日は「先生の日」で祭日であり大学も休みになった。翌日から整理が済んだ図書の装備作業を開始した。装備作業は、ジャケットの処理と背ラベルの貼付を行なった。背ラベルは既存のラベルを使用するのではなく、受入リストに背ラベルのイメージを出力させ、これを背ラベルの大きさに切り取り糊を付けて図書の背に貼付するものであった。特に糊の調達には苦労したが、幸いにも日本で通常使用しているものに近いものが手に入った。日本では金さえ出せばいくらでも楽に手に入るが、ラオスでは日本のように簡単に行かないことを思い知らされた。

10月10日は建設中だった経済経営学部の新学舎の竣工式が盛大に執り行なわれ、私も末席ながら招待を受け出席させてもらった（口絵6参照）。式には首相、教育大臣及び在ラオス日本大使夫妻も出席され、その他大学関係者も多数出席した。式は完成したばかりの図書館の正面で行なわれた。ラオスの習慣に従い記念フラッグが風船とともに青空へ上げられ、またその上がっていく姿はとても眩しかった。このような記念すべき式典に出席でき、こうした時間をラオス人とともに共有できたことは感慨深いものであった。

式典が終了した後、来賓は図書館を通り、コンピュータ室や講義室を案内され、祝賀会会場へと進んでいくが、首相、教育大臣らは図書館を単に通るだけでなく、図書館の閲覧席に実際に座り、暫く歓談された。このとき首相らがどういう発言をしたかは不明であるが、図書館人としてはおおいに気になるところである。このシーンは当日のテレビニュースでも放映された。

祝賀会が終わりオフィスへ戻ってきたとき、マニソット経済経営学部副学部長から学生の支援が始まることを突然聞かされた。この学生の支援は

新図書館への図書の移転まで継続されるとのことだった。11月5日にラオス国立大学開学5周年記念式が挙行されるので、その時までには図書館として完成させておきたかったのである。事実上、私が帰国するまでに図書館を完成させることになった。今までゆったりと流れていた時間が、この日から急に慌しくなった。

学生には装備作業をお願いすることにした（口絵7参照）。まず、サイカム氏に業務の流れを英語で説明し、その後実際に作業をしてもらい説明が十分に理解されたかを確認した。学生にはサイカム氏がラオス語で作業を説明し、質問があればまずサイカム氏に聞くよう指導をした。こうした指導が結局サイカム氏にとって業務の理解が深まり、自信へとつながった。学生は真面目で、素直であった。しかし、紙屑を床に落としても平気なので、屑かごへ捨てるよう注意した。何気無く屑かごの中を覗いてみたら、装備作業が進んでいるにも関わらず、ジャケットの切り残しがほとんどなかった。不思議に思えたので学生に聞いたところ、「ジャケットに書かれている英語を読んで勉強をし、裏の白紙はノートにする。」とのことだった。私はこれまでゴミとしか扱っていないものが、彼らにとっては貴重な英語学習のツールになることがわかった。ジャケットの切り残しはその後捨てることはせず全て取っておいたが、時折学生が持ち帰るのを見る度に頭が下がった。

また、学生には装備作業以外にもデータ入力をお願いした。最初学生にデータ入力をやってもらうのに躊躇したが、パソコン3台をフル稼働させないと間に合わない状況だったので、背に腹は替えられなかったので早速お願いした。学生へのデータ入力指導はサイカム氏をお願いした。特に用がなければ、午後8時位まで残業をした。また、土曜日も出勤して、平日並に仕事をした。サイカム氏も英会話教室がなければ残業をしたし、土曜日も付き合ってくれた。私も必死だったが、サイカム氏も必死だった。

第7週

コンピュータ3台は連日フル稼働だった。データ入力が進んだ図書は私が全てチェックした。ケアレスミスはすぐ修正したが、繰り返されるミスについてはその都度注意した。チェックが進んだ図書は机の上に置き、置

ききれなかったものは、ダンボール箱に詰めた。装備作業は順調に進み、机の上にあった図書の山がみるみる無くなっているのがわかった。机に置けなかった図書はダンボール箱に入れておいたが、こちらの方も次々と空になってきた。その代わりに装備が済んだ図書が次々と空箱に詰められ、作業室の片隅に積み上げられていった。データ入力が終わったらデータをチェックし、次の日の朝に背ラベルを出力し、装備をする、と言った流れの繰り返しだった。最後の方は装備担当者がデータ入力待ちとなる状態だった。

入れ替わり手伝いにくる学生ともうまくコミュニケーションが取れるようになった。最初ははにかんでばかりで、英語で話し掛けてもなかなか会話が弾まなかった。学生の中には日本語を勉強している学生もいて、片言の日本語を話し掛けてくるのもいた。こうした学生の中で遅くまで仕事を手伝ってくれる学生もでてきた。ほとんどボランティアであるが、申し訳ないので彼らが寮に帰るときに残った菓子類やりんごなどを持たせた。彼らは最初遠慮したが、うれしそうに持って帰るようになった。この他に、背ラベルを切り取ったリストの残りなども持ち帰るようになった。ラオスの学生にとってノートは高価であり、こうした切りくずでも、彼らにとってはノート替わりになるのだろう。何度か学生にノートを見せてもらったが、どの学生もノートの紙面を一切無駄にしていなかった。本当に頭が下がる。予定していた図書は今週でほぼ入力完了し、装備も終え後は新図書館へ運び入れるところまでようやく漕ぎ着けた。

第8週

ラオス滞在も今週で最後になり、週末で帰国することになっていた。月曜日には装備が済んだ図書を新図書館に運び出す予定になっていたが、今週から新図書館を会場にして「インド図書展」が開催され、初日にはインド大使館主催の記念式典が開催される関係で新図書館へは一切作業が行なえなかった。翌日は朝から図書を運び入れるのと平行して、書庫内の書架、キャビネット類の配置換えをし、パソコンを設置する机も学部事務室から調達してきた。図書の運び入れや書架の配置換えの作業は学生が大勢手伝ってくれた。午後には箱を開封し、書架に配列する作業を開始した。

配架中に請求記号のミスを発見したり、背ラベルが剥がれていたり、予想していたこととは言え、帰国目前の状態では後処理をする時間でさえ惜しかった。これとは別に寄贈図書もできるだけデータ入力をしておきたかったので、学生2人にデータ入力を継続させていた。但し、図書展の終了時間（午後4時）以降は、図書館への入館を禁止するインド大使館側の強い希望があり、図書館の鍵の管理自体も図書展開催中はインド大使館が行なっていた。午後4時以降も作業を継続して、未整理の図書のデータ入力やミスデータの修正をしたかったので、パソコンは作業室に残したままにした。

図書館にはエアコンが設置されておらず、天井ファンがフル回転していた。おまけに書庫の上部にはこの天井ファンが設置されていないので、窓を開けてはいるものの汗だくの作業となった。サイカム氏が学生に色々と指導してくれたので本当に助かった。サイカム氏も学部の会議などで時折作業を抜けることがあったが、学生同士がお互いに協力しあう姿を見てほえましかった。約1,700冊程の図書ではあるが、図書が書架に並べられ、図書館らしくなっていく光景をみてとても感動した。「早く本を読んでみたい。」「新しい図書館で勉強したい。」と、言い出す学生もいて図書館人としてはうれしかった。

帰国前日にはJICA ラオス事務所へ最終報告をすることになっていたが、パソコンを新図書館へ運び込んだのが、その日の午前中であった。午後には配線を接続し、動作の確認をした。JICA 事務所へ行く時間になったので、車に飛び乗るようにして事務所へ向かった。その後2時間ほどでまた図書館へ戻って来た。図書館の鍵については、マニソット副学部長に申し入れてインド大使館に交渉してもらった。その後2時間ほど補足説明やサイカム氏からの質問に答えたりして最終日を終えた。

9 今回の課題とこれからの支援

今回の派遣は2ヵ月間という限られた時間で、まったく図書館の知識の無い担当者をカウンターパートとして教育しなければならなかった。幸いにも2000年度受入の図書は無事に入力が完了し、図書館システムには大

きなトラブルも無く現在まで稼働している。しかし、これからシステムのトラブルやラオス側の機能の追加希望などが出てくる可能性がある。こうした場合は派遣が既に終了しているので公的な要請が必要になるが、現在では担当者同士の私的なコミュニケーションに頼っているのが現状である。また、どこまで本学がサポートしていくのか、その期間や内容も明確にはなっていない。

更に今回のラオスプロジェクトが終了する頃までには、フォローアップの指導やプロジェクト自体のまとめをしなければならないだろう。JICAからいずれ派遣要請があると考えられるが、本学独自の支援活動についても考えておく必要がある。ラオス国立大学は本学とは協定校であり、教員の交流を始め、将来的には大学管理・運営のノウハウの支援を中心とした職員の交流も実現することだろう。本学とラオス国立大学とは良好な信頼関係を保持しており、ラオス国立大学の本学への期待は相当大きいと言える。こうした期待に応えていかなければ、せっかくここまで築き上げたものが、砂の城が海の波に流されるようにはかなく消えていくことだけは絶対に避けていかなければならない。

10 おわりに

ラオス行きの話が最初に来たのは2000年の9月だった。連絡が来た当日は、大学の同期会があり数年振りに友人に再会した日のことだった。帰宅して暫くして電話が鳴り、当時の所属長からの電話だった。ラオスと聞いて最初はとんでもないところに行くのだと悩んでいたが、その間自分なりに色々ラオスについて調べてみた。結局は行くことにしたが、胸中はずごく不安だった。新図書館への移転作業、新図書館のオープンなど通常業務の方は多忙を極めていたが、ラオスへの1次派遣は、新図書館がオープンして間もなくのことだった。

この第1次派遣時にヴィエンチャン市内の図書館の施設及び業務見学、担当者への聞き取り調査等を行なったが、図書館の設置数、蔵書数など根本的な問題は山積しているが、ラオスにおける図書館の管理・運営は思ったより機能していて、一部の図書館ではコンピュータを導入しての目録管

理や、専任のレファレンス・ライブラリアンを置いてサービスを行なっている図書館もあった。

しかし、図書台帳、目録、背ラベル等の作成などでは手書きの作業を行ない、そのため人的なケアレスミスや非効率とを感じる管理・運営を行なっているのが現状であった。こうした前近代的な図書館管理・運営から脱却して、より進んだ効率的で近代的な図書館管理・運営を目指す必要があった。こうした方向性へ支援することが我々の使命であったのではないかと思う。

こうしたラオスでの図書館作りをしている間、時々思い出すことがあった。それは小学生の時に読んだコナン・ドイルのシャーロック・ホームズの短編集の中の、「海軍条約事件（原題 The adventure of the Navy Treaty）」という作品であり、その中にホームズと彼の助手であるワトソンがロンドンへの汽車の中での会話であった。車窓から見える小学校の建物をホームズがワトソンに説明をする件がある。ホームズは小学校を灯台に喩え、こう続けた。「灯台さ、きみ。未来の標識灯ってわけだよ。一つ一つに何百もの、きらきらかがやく小さな種がつまっているカプセル、しかしそこからは、よりかしこく、よりすばらしい未来のイギリスが出現するんだ。（後略）」¹ この台詞の中の「イギリス」を「ラオス」に言い換えれば、将来のラオスの政治、経済を担っていく学生たちがこの大学で学びそして巣立っていくことになるこの灯台を作る手伝いができることになる。ラオスにおいて大学は1校しかなく、ラオスの将来を託されたエリートたちがこの大学で学ぶことになっているので、教育の良し悪しがラオスの将来を決めかねないと思うと、大変な重責があり、ある意味では怖い。しかし、我々が作った図書館で学んだ学生たちが将来のラオスをどう導いてくれるのか楽しみであり、また将来にわたって見守っていく責任があると実感している。

¹ コナン＝ドイル作、河田智雄訳、「海軍条約事件」、『シャーロック＝ホームズの思い出』完訳版、下巻、偕成社文庫3181、偕成社、1990年より。

11 謝辞

海外派遣は自分にとってもいい経験になった。いずれ自分の経験を社会に還元しなければいけないと考えていたが、このように早期でかつ海外へと還元できたことは、幸運だと言える。幸いにも職場の理解にも恵まれたので、2ヵ月の長期派遣も実現できた。ここでお礼を述べたい。

今回のラオス派遣の成功には図書館システムの存在を無視できない。特に図書館庶務課システム担当の中林雅士氏の類まれな才能と弛まぬ努力のおかげで今回の図書館システムが完成できた。彼には相当の我が侘を言ったが、ほとんどが実現できた。新図書館オープン、パソコン・リプレイスなど多忙を極めていたが、彼のシステム開発に対する姿勢には頭が下がる。彼が今回のラオス・プロジェクトに大きく貢献していることは否定できない。この場を借りて、彼に感謝を述べたい。

そして、ラオス国立大学経済経営学部のカムサイ君の存在も無視できない。彼女の努力があったからこそ、このプロジェクトが成功へと導かれたと言える。彼女にとっては、図書館担当になることは相当重責だったかも知れないが、新任の先生、学生への指導する姿を見るに付けて、私のカウンターパートとしての役割を十分に果たしたし、これからの図書館運営の中心的役割を担い続けることであろう。彼女のこれからの活躍に期待したい。

最後に、ラオスで出会った学生たち、特にカニダさん、カムサイ君、ブニボン君の3人には感謝しなければならない。なぜなら、彼らの積極的な手助けがなかったならば、このハードなプロジェクトも、成功へは導かれなかったことであろう。彼らに出会ったことで、今回の派遣が「大学」図書館支援であることを十分に認識できた。そしてこの図書館の利用者である学生たちとともに図書館作りができたことは、ラオスでの美しい思い出とともにかけがえのない財産になった。

ラオス語で水は「ナン」と言うが、この水に関する様々な言葉がいくつもある。人々にとって水はかけがえの無いものであり、生きていく上で必要不可欠なものであるからであろう。例えば、涙を「目の水」と表現したりする。でも、ラオス人の言葉への繊細さはこれだけではない。「心の

水」と表現する言葉がある。これは日本語にすれば、「真心」、「思いやり」、「慈しみ」などと訳することができる。私はラオスでこの「心の水」を一杯もらったような気がする。

参考文献

- [1] 綾部恒雄、石井米雄編 「もっと知りたいラオス」 弘文堂 1996年
- [2] 上東輝夫著 「現代ラオス概略」 同文館 1992年
- [3] 上東輝夫著 「ラオスの歴史」 同文館 1990年
- [4] 青山利勝著 「ラオス―インドシナ緩衝国家の肖像―」『中公新書』1245
中央公論社 1995年
- [5] 石井米雄、桜井由躬雄編 「東南アジア史1大陸部」『世界各国史』5
山川出版社 1999年
- [6] 石井米雄、桜井由躬雄編著 「東南アジア世界の形成」『ビジュアル
版世界の歴史』12 講談社 1985年
- [7] 京都大学東南アジア研究センター編 「事典東南アジア 風土・生
態・環境」 弘文堂 1997年
- [8] 石井米雄[ほか]監修 「東南アジアを知る事典」新訂増補版 平凡
社 1999年
- [9] 滝川勉編 「新・東南アジアハンドブック」 講談社 1988年
- [10] 山田紀彦編 「ラオス」『アジア動向年報』2001 p.247-262 アジ
ア経済研究所 2001年
- [11] 地球の歩き方編集室編集 「ラオス」2002～2003版『地球の歩き方』
111 ダイヤモンド・ビッグ社 2001年